

審査結果の要旨

審査対象者 小林 幹紘

思春期青年期（15歳以上22歳未満）のがん患者は、就学・就労、結婚・妊娠出産など様々なライフイベントを迎える世代であり、がん治療や治療に伴う合併症への対応とともに、多様な背景や発達段階に応じたケアが求められる。しかし、わが国の医療システムにおいて、この世代のがん患者は小児医療と成人医療の狭間に位置づけられていること、稀少がんの割合が高いことから、看護の実態に関する研究がほとんど行われていないのが現状である。この世代のがん患者をケアする看護師への教育的介入の必要性を明らかにした研究は散見するものの、プログラムの内容にまで言及した研究は見あたらない。

そこで、本論文では、思春期青年期がん患者の看護の実態と課題を明らかにし、看護師の教育プログラムに必要な要素を明らかにすることを目的として、思春期青年期がん患者をケアしている看護師を対象に、半構造化面接とフォーカスグループインタビューを実施した。そこで、看護実践内容や実践に臨む看護師の姿勢の実態と看護師が捉えた課題を検討した結果、教育プログラムには「思春期青年期のがんと発達過程の理解」、「主体性を尊重しながらニーズを探る姿勢」、「がんと共に生きる患者の自律を支えるケア」の3つの観点が見出された。さらに、これらの観点と学習ニーズとの関連性から、教育プログラムに必要な要素として、思春期青年期世代がんの特徴や発達過程、妊孕性の問題に関するアプローチに加えて、患者との関わり方や患者を尊重した意思決定支援、晩期合併症と生きる患者への支援や思春期青年期世代がん患者のピアサポートなどが示された。

以上から、本論文は希少な研究分野である思春期青年期世代の看護ケアの実態と課題を明らかにし、ケアに携わる看護師への継続教育の必要性を示唆する先駆的研究として評価された。インタビューを通して、看護師らの経験に基づく豊富なデータが盛り込まれており、現場の状況が説得力を持って明確に記述されている。さらに、AYA世代の中でも特に情報が少ない思春期青年期世代の看護継続教育や看護師への支援に関する新しい知見が導き出されており、臨床適応可能性が高いことも予測できる。

予備審査時に指摘された結果の明確化、結果と考察の整合性については一定の修正が加えられたが、考察の深化という点で若干の課題が残った。今後さらに継続して研究に取り組み、看護実践に活用できる看護師の継続教育プログラムを作成することが期待される。

学位審査委員会では、看護学研究の発展に寄与し小児看護学の実践の向上に意義を有することを高く評価し、本論文を博士（看護学）の学位授与に値するものとして認める。

[別紙 3]

試験結果の要旨

4
1

審査対象者 小林 幹紘

上記の論文提出者に面接し、論文内容および関連事項について試問をおこなった結果、合格と判定した。

よって、博士（看護学）の学位を受けるに十分な能力を有すると認めた。

看護学研究科